

争納后妃

〔繁花物語花也〕せつしやうには、略中九でうどの師輔の御二郎、ない大宏んかねみちのおとまり給ぬ、かゝるほかにねんがうかはりて、てんえん元年といふ、よろづにめでたくておはしませ、によう融后兼道女、圓いつしかきさきにとおぼしいそぎたり、略中かくてそのどしの七月一日、せつしやうどのにようご、きさきにるさせ給ぬ、中宮と聞えさせ、略中御ありさまいみまうめでたう、世はかうぞあらまほしきとみえさせ給ふ、みか融一圓はんのみや融同母妹の御かた、中宮の御かたとかよひありかせ給、うちわたりすべていまめかし、ほりかはどのとどこのせつしやうどのをばきこえさする、いまはくわんばくどのとどきこえさすめる、略中この東三でうどの弟兼通くわんばくどのの御中ことにあしきをよの人あやしきことに思ひきこえたり、いかでこの大しやうをなくなしてばやとぞ御心にかゝりて大どのはおぼしけれど、いかでか東三でうどのは、なほいかでの中ひめぎみ子をうちにまゐらせん、いひもていけばなにのおそろしかるべきぞと覺しとりて、人まれずおぼしいそぎけり、されどそのけしき人に見せきかせ給はず、このほりかはどのと東三でうどのは、只閑院をぞへだてたりければ、東三でうにまゐるむまくるまをば、大どのはそれまゐりたり、かれまうづなりといふことをきこしめして、それかれこそついそうするものはあなれなど、くせくしうの給はすれば、いとおそろしきことにて、よるなどをまのびてまゐる人もありける、さるべきふつしんの御もよほしにや、東三でうどのなほいかでけふあすもこの女君まゐらせんなどおぼしたつと、おのづから大どのきこしめして、いとめざましきことなり、中ぐうのかくて、おはしますに、この大なごんのかくおもひかくるもあさましうこそ、いかによろづにわれをのろふらなどいふことをさへつねにの給はせければ、大なごんどのいとわづらはしくおぼしたえて、さりともおのづからとおぼしけり、はかなく年もかはりぬ、貞元元年ひのえねのとしといふ、かのれいせんゐんによう